



Integrated Research in the Bishri Mountains on the Middle Euphrates

セム系部族社会の形成



文部科学省科学研究費補助金
「特定領域研究」
Newsletter No. 7

2007年7月号



はじめに

この8月の第3次現地調査で、本年2月から3月におこなった第1次現地調査（遺跡分布調査）の成果を踏まえて発掘遺跡に選定したガーネムアリ遺跡の発掘調査が開始されました。発掘調査の成果に関しては別の機会にゆずりますが、本領域が飛躍的に進展したことは事実です。

ガーネムアリ遺跡は前期青銅器時代の年代で、本領域研究の全体課題「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」を推進するための絶好な遺跡です。また、同遺跡の周辺には、ユーフラテス河氾濫原の農耕村落遺跡群、氾濫原直近河岸段丘上の墓地遺構群、ビシュリ山北麓のケルン墓群が分布しています。これらの遺跡・遺構群の担い手は同一の「部族性」を共有していたと考えられます。本領域研究では現在、この「部族性」の内容を、現地調査がもたらす物質的痕跡を通して、解明しつつあります。

このニューズレターNo.7は、3つの論考で構成されています。

その一つ、藤井純夫、足立拓朗両氏による「2007年度ビシュリ山系北麓ケルン墓サーベイ」は、2007年5月18日から6月1日まで実施されたビシュリ山系北麓における青銅器時代ケルン墓の分布調査の概報ですが、このなかで、「ビシュリ台地北縁における竪坑墓群がユーフラテス流域に点在する定住農耕集落（ないしは都市）の墓域と考えられ、ビシュリ山系北麓のケルン墓群は、明らかに先史遊牧民の墓域で、部族の聖地と定めるビシュリ北麓に墓域を置いて、自らのアイデンティティとしたのであろう。ユーフラテス流域の定住社会とビシュリ山系北麓の遊牧社会の間には人的な出入りを含めて密接な関係があったと思われる」と述べられており、本領域研究の今後の進行のあり方を示しています。

二つめの論考は、池田潤氏の「比較言語学から見たセム語の起源（Urheimat）」です。氏は再建語彙からセム語の原郷を探られ、「セム祖語の話し手は地を耕し、種をまき、穀物をあおぎ分けていたことが分かる。作物には大麦、小麦、雑穀があり、それをひいて粉にしていた。近くにクミンが生え、アーモンド、テレビン、イチジク、ナツメヤシ、ブドウの木もあり、実を食べたり、酒を作ったりしていた。（ハチ）ミツも食べた。また、ウシ、ロバ、ヒツジ、ブタ、ヤギ等の大小の家畜を飼っていたようだ。これらの語がセム祖語に存在するのは、セム語の原郷で農耕や牧畜がおこなわれていたからにはほかならない。したがって、セム語の原郷はそれが可能な場所であったと考えられる。言い換えるなら、比較言語学から見るとビシュリ山系は「セム語族」の原郷ではなさそうである。無論、これはビシュリ山系がセム系一部族の原郷である可能性を否定するものではない」と述べられ、本領域研究にとり極めて有益な示唆を提起されています。

第三番目の論考は、前川和也氏の「＜シュメール文字＞文明」のなかの「語彙リスト」です。これは「前4千年紀末、おそくとも3千年紀中葉までにかけてメソポタミア、シリア各地で成立し、前2千年紀のはじめまで繁栄をつづけた都市（国家）群の文明装置」として狭義に定義される「＜シュメール文字＞文明」の成立と展開」を象徴する「語彙リスト」に関する記述です。

このように、ニューズレター本号には、現地調査が急速に進展した本領域研究の今後の展開にとって重要な情報に富む3編の論考が掲載されています。

平成19年9月2日
領域代表者 大沼克彦

目次

2007年度ビシュリ山系北麓ケルン墓サーベイ	藤井純夫	1
	足立拓朗	
特定領域研究「セム系部族社会の形成」研究発表会 2006/10/22, 古代オリエント博物館		
比較言語学から見たセム語の起源（Urheimat）	池田 潤	6
「＜シュメール文字＞文明」のなかの「語彙リスト」	前川和也	11

表紙

A
B | C

A：ヘダージェ1 = ケルン墓群遠景

B：ヘダージェ1 = ケルン墓群：10号ケルン墓の基礎壁または周壁

C：ヘダージェ1 = ケルン墓群：10号ケルン墓に付帯する独立壁

2007年度ビシュリ山系北麓ケルン墓サーベイ

藤井純夫（金沢大学文学部）

計画研究「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」研究代表者

足立拓朗（中近東文化センター附属博物館）

計画研究「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」研究分担者

1. はじめに

2007年5月18日から6月1日までの約2週間（実質1週間強）ビシュリ山系北麓における青銅器時代ケルン墓の分布調査を実施した。同年2月に実施した予備調査（藤井2007）が調査区全体の下見にとどまったのに対し、今回は個々のケルン墓の記録や計測をも含めた本格的なサーベイとなった。ただし、日程的な制約のため包括的な踏査は断念し、将来の発掘対象となるケルン墓群の選定を優先課題に据えて踏査した。担当したのは、計画研究班「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」の研究代表者（藤井）・分担者（足立）および協力者（鈴木香枝）の、計3名である。シリア側からは、モハムード・アル・ハサン（Mohmudal-Hassan考古局ラッカ支局）が、査察官として同行した。以下は今回の踏査の概報である。

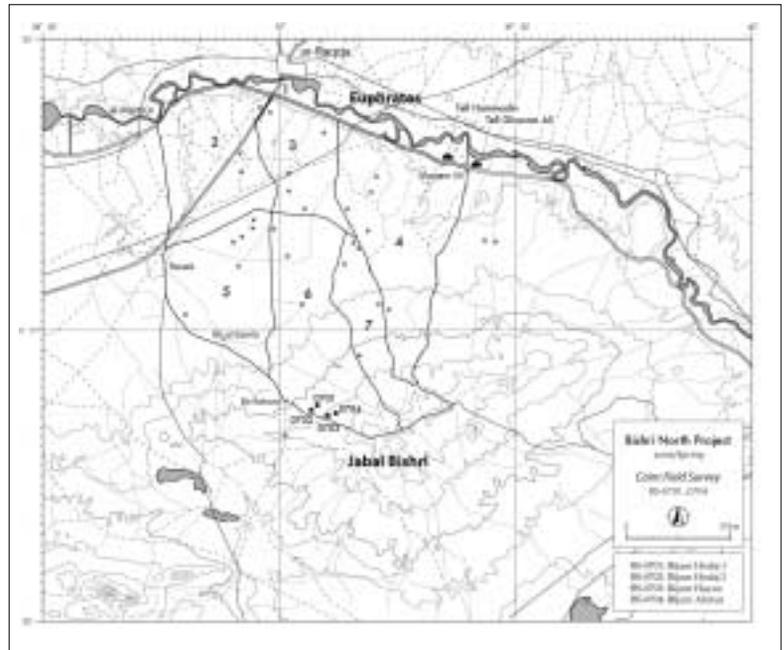


図1 調査区とその区割り（×：道標ケルン、○：ケルン墓）

2. 調査方法

日程的制約がある中での広域踏査は、ややもすると焦点のぼやけたものになりがちである。そこでまず、調査区域（北はユーフラテス河、南はビシュリ山系の東西尾根筋、東はガーナム・アリ道路、西はマンスール＝スフネ道路によって囲まれた、一辺約50 - 60km、総面積約300平方kmの逆台形状のエリア）を、道路や轍によって7区画に分割した（図1）。このうち、ユーフラテス河畔の沖積地（1区）については別の計画研究班が踏査を終えていたので、今回の踏査対象からは除外した。残りの6区画を北側の台地・平原部分（2～4）と南側の山麓部分（5～7区）に大別し、前者の側から調査を開始した。

まず、北側の台地・平原部分から。このエリアにケルン墓が希なことは前回の予備調査で確認していたので、今回は、シリア国土地理院発行の5万分の一地図に「Rujm(ケルン)」または「Rijum(その複数形)」と記載された地点（地図の×印）のみを、集中的に踏査した。踏査は、宿舎のあるラッカ市から遠い順（つ

まり、4区から2区の順）に実施した。近くまで行ったが正確な位置を確認できなかった事例、それすら早々と諦めた事例もあるが、踏査としてはほぼ全域をカバーした。この踏査には、調査前半の3日間を費やした。

台地・平原部分の踏査終了後、一日の休日を挟んで、ビシュリ山系の北麓に踏査を移した。前回の予備調査で地図に記載されていないケルン墓群の存在を多数確認していたので、このエリアでは地図の記載に頼らず、悉皆調査に近い精度で踏査した。しかし、何分にもアクセスが悪すぎた。宿舎のあるラッカ市とこのエリアとの往復に、毎日約4時間。ケルン墓群を遠望した後、轍を辿ってアプローチするのに片道約1時間。よって残りの時間は少なく、一日に1～2件、全体で4件の踏査が精一杯であった。個々のケルン墓群の規模が大きく、かつ分散型であったことも、作業効率を悪くした。小縮尺の地図を利用できなかったこと、にもかかわらずGPSの利用を禁じられていたことも、大きな障害となった。

もう一つ、問題があった。それは、現地の遊牧民が青銅器時代のケルン墓を古い道標と見なしており、そ

のため、ケルン中央にわざわざ石を積み直して小規模の道標ケルンに仕立て直していたことである(図2)。このことが、作業効率のさらなる低下を招いた。なぜなら、遠望して明らかに新しいケルンの場合も、その下に本来のケルン墓が残っている可能性があり、逐一、観察してみなければならなかったからである。そのため、その口スも大きかった。

幸いだったのは、踏査の早い段階で有望なケルン墓群(後述)に遭遇したことである。これによって、近い将来の発掘対象を確定するという当面の課題だけは、何とかクリアすることができた。時間的制約のある中で有望なケルン墓群を選定できたのは、ビシュリ北麓の寒村ビル・ラフーム(Bir Rahum)で偶然知り合ったベドゥイン青年、アリー君のおかげである。その土地で生まれ育った人にはかなわない。毎度のことではあるが、そのことを改めて痛感した。

なお、遠望しただけで実際には踏査していないケルン墓群が多数残ったが、これは今後の課題である。しかし、これらのケルン墓群はアクセスの難しいものばかりであり、ラッカ市との往復では踏査はもはや不可能である。宿舍自体をビシュリ山系北麓の村に移す必要がある。そこで、本計画研究班では以下の方針をとることにした。すなわち、発掘対象のケルン墓群を確定したこの段階で、分布調査を一端中断。ビシュリ山系北麓に宿舍を移して、できるだけ早い時期に試掘・発掘調査に



図2 ケルン墓と積み直し道標ケルン
(ハイユーズ=ケルン墓群02号ケルン墓)



図3 ジャズラの豎坑墓群(南から)

移行。その作業と平行して、分布調査の範囲を徐々に拡大する、という方針である。今後はこの方針で臨みたい。

3. 台地部分の踏査

結論から先に言うと、地図上に「Rujm何々」または「Rijum何々」と記載されたものは、すべて近年の道標または三角点としての石積み・土盛りであった。(よって、地図上のRujm/Rijumは、「ケルン墓」というよりもむしろ「道標」の意味で用いられている可能性が高い。) 前回の予備調査で予想されていたことではあるが、青銅器時代遊牧民のケルン墓と目される事例は、このエリアには皆無であった。無論、見落としが無いとは断言できないが、少なくともケルン墓がこのエリアに希薄であることだけは確かであろう。

ところで、「ケルンCairn」には実際には様々な機能がある。このうち、埋葬目的のものだけを「ケルン墓」と定義している。本計画研究班の調査対象が、これである。それ以外のケルンとしては、例えば、道標ケルンや記念碑ケルン、あるいは祈願ケルンなどがある。これらは比較的新しいものが多く、我々の調査対象ではない。では分布調査の段階でどうやって両者を識別するのかというと、決め手は内部構造の有無にある。ケルン墓は、通常、埋葬を想定した空間(シスト部分)を中央に組み込んでいる。ケルン墓が盗掘されている場合、幸か不幸か、その存在が露呈することがある。一方、道標ケルンなどは単なる石積み過ぎないので、明確な内部構造を持たない。もう一つの違いが、付帯遺構の有無である。ケルン墓は埋葬施設であるから、墓本体以外にも様々な葬祭関連遺構を伴うことがある。一方、道標ケルンなどの場合、それは稀である。加えて、分布形態も異なる。密集型・分散型の違いはあるにしても、ケルン墓は単独では存在せず、ケルン墓群を形成することが多い。これは、一つの墓域が部族の聖地として長期間使用され続けるからである。道標・祈念碑・祈願ケルンの場合、そのようなことは稀である。よって、それらは単独または少数の群を形成しているに過ぎない。分布調査の段階でもケルン墓とそれ以外のケルンをある程度識別できるのは、以上の理由による。

さて、中間エリアにケルン墓群が希薄であることは再確認できた。しかし、このエリアに別のタイプの墓域が無いのかというと、必ずしもそうではない。ビシュリ台地の北縁部で、ジャズラ(Jezra)やアブ・ハマド(Abu Hamad)など、前期青銅器時代の豎坑墓群が確認されているからである(図3,4)。後述するように、これらの豎坑墓群はユーフラテス河畔に点在する定住農耕社会側の墓域と考えられる。

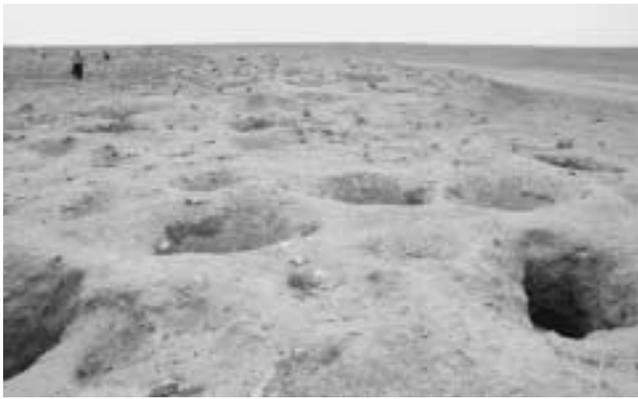


図4 アブ・ハマドの豎坑墓群（西から）



図5 ヘダージェ1 = ケルン墓群遠景
（手前から順に8号、9号、10号ケルン墓）

4. ビシュリ山系北麓の踏査

このエリアでは、平坦な北半部を飛ばして起伏のある最南端部分、すなわちビル・ラフーム村の周辺から踏査を開始した。前回の予備調査で、この地域にケルン墓が集中することを確認していたからである。踏査の結果、以下に述べる4件のケルン墓群を確認・仮登録した（図1）。

ヘダージェ1 = ケルン墓群（Rijum Hedaj 1）

ビル・ラフーム村の東約7 kmにあるテーブル状台地の上に位置する。計14基のケルン墓から成るが、そのうちの9基（2～10号ケルン墓）は、石灰岩岩盤の覗く台地南縁に、互いに100m前後の距離を置いて連なっていた（図5）。その全長は、約1 kmである。一方、石灰岩露頭のない台地北縁には、わずか1基（11号ケルン墓）のみが築かれていた。ただし、台地北東端の舌状台地（石灰岩露頭があって浸食を免れている）には、3基のケルン墓（12 - 14号ケルン墓）が集中して築かれていた。

ケルン墓の保存状態は、比較的良好であった。（ただし、前述のように、道標ケルンとしての部分的積み直しは随所に見られた。）ケルン墓は通常円形プランで、直径は約4～13m、比高は最大約1.5mであった。建材には、周囲の露頭から運んだと思われる未加工かつ粗質



図6 ヘダージェ1 = ケルン墓群：10号ケルン墓の基礎壁または周壁（西から）



図7 ヘダージェ1 = ケルン墓群：10号ケルン墓に付帯する独立壁（北東から）

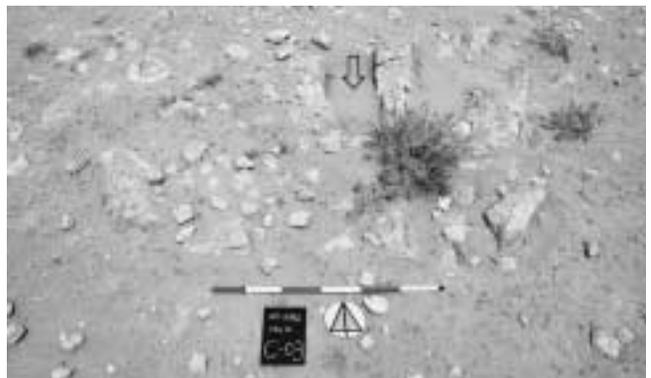


図8 ヘダージェ2 = ケルン墓群：03号ケルン墓のシスト（南から）

の石灰岩（20 - 50cm大）が用いられていた。09号ケルン墓はその規模の点で、10号ケルン墓は基礎壁（図6）および長さ約70mの独立壁（図7）を伴う点で、14号ケルン墓は大型の周壁を伴う点で、それぞれ注目される。ヘダージェ2 = ケルン墓群（Rijum Hedaj 2）

このケルン墓群は、ビル・ラフーム村から東に約5 kmの地点に位置する。前述のヘダージェ1 = ケルン墓群からは南西に約1 kmの距離で、ワディを挟んで対峙している。2本の小ワディに挟まれた舌状台地の突端部に、3基のケルン墓が築かれていた。ケルン墓の直径は約3～7 m、比高は最大約0.6mであった。このケルン墓群は密集型で、互いに10m前後の距離を置くのみであった。1号ケルン墓は小型の矩形遺構と独立壁を伴う点で、3号ケルン墓はその中央に矩形のシストを露出している点で（図8）それぞれ注目される。

ハイユーズ=ケルン墓群 (Rijum Hayuz)

ビイル・ラフーム村の東約15kmの地点に位置し、計9基のケルン墓から成る。01号ケルン墓は独立丘の頂上に単独で築かれていたが、他の8基のケルン墓は、南北に連なる丘陵尾根上に、100m前後の距離を置いて並んでいた(図9)。ただし、それらは決まって尾根筋の頂上部を占めており、鞍部への築造例は認められなかった。ケルン墓の直径は約3~13m、比高は最大約1.2mであった。2号ケルン墓は矩形遺構が付帯する点で、8号ケルン墓は幅の広い独立壁が付帯する点で、注目される。

アハマル=ケルン墓群 (Rijum Ahmar)

ビイル・ラフーム村の東約20kmの地点に位置する。丘陵全体の色調がやや赤味(我々の色彩感覚からすればむしろ褐色)を帯びていることから、この名がある。



図9 ハイユーズ=ケルン墓群：02 - 09号ケルン墓の遠景(東から)



図10 アハマル=ケルン墓群：01号ケルン墓(奥)と付帯遺構(手前)(南東から)



図11 アハマル=ケルン墓群：02号ケルン墓の基礎壁または周壁(北西から)

計5基のケルン墓から成るが、3つの独立丘の頂上部に1~2基ずつ分かれて築かれていた。ケルン墓の直径は約2~17m、比高は最大約1.1mであった。01号ケルン墓は大型の矩形遺構を伴う点で(図10)、02号ケルン墓は明確な基礎壁または周壁を伴う点で(図11)、重要である。

4件のケルン墓群の特徴は、以下のように要約できる。一件のケルン墓群は、3~10数基程度のケルン墓によって構成されている。

ケルン墓群は見晴らしのよい、しかも建材調達しやすい(石灰岩露頭を伴う)丘陵尾根上に位置する。ただし一口に丘陵尾根と言っても、実際には、テーブル状台地の縁辺部(リジューム・ヘダージェ1)と、独立丘またはその連続体の頂上部(リジューム・ハイユーズ、リジューム・アハマル)の、二種類がある。

ケルン墓群を構成する個々のケルン墓は、(平坦なテーブル状台地の場合ですら)互いに100m前後の距離を置いてほぼ直線的に連なっており、レヴァント南部のような密集群を形成しない。

ただし、ヘダージェ1=ケルン墓群の12~14号ケルン墓のように、数件程度の内部的な小型密集群を形成することはある。ヘダージェ2=ケルン墓群を構成する3基のケルン墓も、小型の密集群を形成していた。

一方、個々のケルン墓の型式・構造に関しては、以下のような特徴が認められた。

建材には、ケルン墓の周囲で調達可能な未加工かつ粗質の石灰岩が用いられている。

プランはほぼ円形、直径は約3~17m、比高は最大約1.5mである。

マウンドの中央に、しばしば矩形または楕円形のシストを伴う。その長軸は、多くの場合、南北方向である。(よって、イスラーム以前の墓であることは明らかである。)

マウンドの外周に、(しばしばケルン本体とは異なる大型かつ良質の建材を用いた)基礎壁または周壁を伴うことがある。この部分の建材には、一部加工したものが含まれる。

マウンドの周辺にも独立壁や大小の矩形遺構などが付随し、全体として、小規模の建築複合体を形成することがある。

5. 展望

2回の現地調査を通して、この地域における青銅器

時代の墓制に関して、以下のような見通しが得られた(図12)。

- 1) テル・ガーナム・アリ(Tell Ghanam Ali) やテル・ハンマディーン(Tell Hammadin) など、前期青銅器時代のテル型集落遺跡が集中するユーフラテス河畔沖積地には、同時代の墓域は見あたらない。
- 2) ただし、ユーフラテス沖積地との接点となるビシュリ台地の北縁には、ジェズラ(Jezra) やアブ・ハマド(Abu Hamad) のような竪坑墓群が存在する。表採土器の分析(長谷川敦章・木内智康の私信)によると、これらの墓域は近隣の集落とほぼ同時期と考えられる。出土遺物の内容から見ても、これらの竪坑墓群は定住農耕社会側の墓域であった可能性が高い。
- 3) 一方、遊牧民のケルン墓群はビシュリ山系の北麓、特にピイル・ラフームの東部丘陵地帯に集中している。その年代は不明であるが、ジャフル盆地やゴラン高原のケルン墓との比較から、前期青銅器時代と想定される。だとすれば、これらのケルン墓群は台地北縁の竪坑墓群とほぼ同時期の、ただし遊牧民側の墓制と見なし得るであろう。「マルトゥ」「アムツル」の墓である可能性が高い。
- 4) なお、両者の中間地帯では、竪坑墓群もケルン墓群も確認されていない。地図にRujm/Rijumと記載されたものの大半は、比較的新しい、単なる道標としてのケルンであった。よって、このエリアは墓域の空白地帯と定義できる。

以上のことから、調査区内における前期青銅器時代の墓制は、南北二つのタイプに分類される。一つは、ビシュリ台地北縁における竪坑墓群である。これは、おそらくユーフラテス流域に点在する定住農耕集落(ないしは都市)の墓域と考えられる。耕作地の外側、日帰り放牧圏の縁辺に墓域を置くことによって、その内側が自らの領域であることを表示しているように思われる。(ヨルダンの調査でも判明していることであるが、前期青銅器時代の墓域は通常、生活圏の最遠端に形成され、そこから徐々に内側に延びるという傾向がある。) もう一つは、ビシュリ山系北麓のケルン墓群である。これは、明らかに先史遊牧民の墓域と定義できる。部族の聖地と定めるビシュリ北麓に墓域を置いて、自らのアイデンティティとしたのであろう。

重要なのは、墓域が南北に分離しているからと言っ

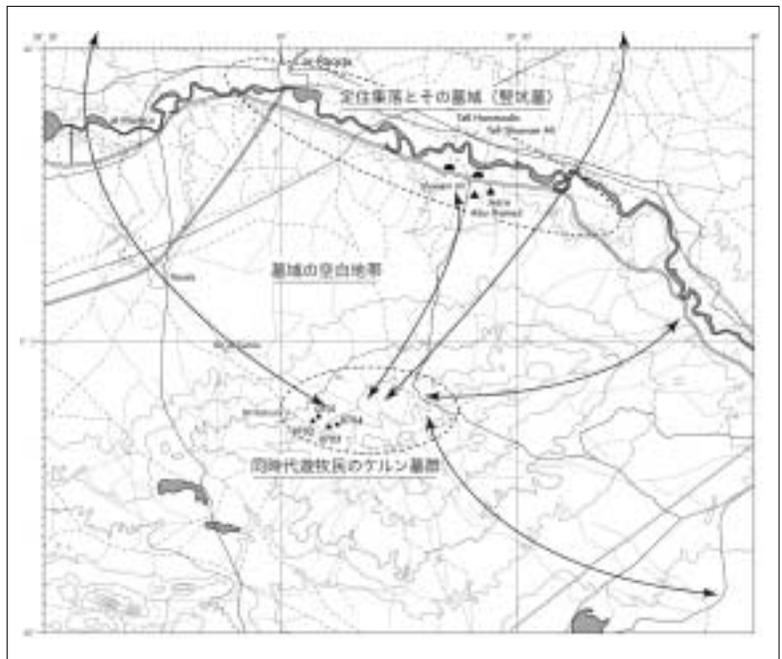


図12 南北二つの墓制と青銅器時代遊牧民の動向(模式図)

て、ユーフラテス流域の定住社会とビシュリ山系北麓の遊牧社会が互いに没交渉であったとは限らない、という点である。それどころか、現在の社会がそうであるように、両者の間には人的な出入りを含めて密接な関係があったと思われる。そのことを、両地域の平行発掘によって実証したい。その実証は、定住社会と「マルトゥ・アムツル」との具体的な相関を明らかにするという意味で、メソポタミア世界で起こったことの北方版シミュレーションとなり得るであろう。それだけではない。シュメールやアッカドの粘土板文書の言う「ビシュリ」が、必ずしも当該遊牧集団の生活圏そのものではなく、むしろ彼らの聖地・墓域・アイデンティティを指すに過ぎないということも、提示し得るかも知れない。

6. おわりに

本特定領域研究申請時の主題に沿った複合調査が、ようやく実現しつつある。各班の調査成果が互いに重なり合い始めるのも、そう遠い先のことではあるまい。唯一の気がかりは、シリア側関係者の中に、青銅器時代ケルン墓の重要性を分かっていない人が多いことである。しかしこれは無理のないことで、シリアでは(占領地のゴラン高原を除いて)ケルン墓の調査はささる低調であった。しかし、だからこそやりがいもある。早い時期に試掘・発掘調査に移行したい。

引用文献

藤井純夫

2007「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究：平成18年度研究報告」『セム系部族社会の形成平成18年度研究報告』(印刷中)

特定領域研究「セム系部族社会の形成」研究発表会 2006/10/22, 古代オリエント博物館 比較言語学から見たセム語の起源 (Urheimat)

池田 潤 (筑波大学大学院人文社会科学研究科)

計画研究「西アジアにおける都市化過程の研究」研究分担者

1. 先行研究

セム語の原郷に関する19世紀までの先行研究はWright (1890) にまとめられている。これによると、19世紀にはメソポタミア起源説とアラビア半島起源説とが存在した。Wright自身は、当初メソポタミア起源説を支持したが、本書を執筆した1877年の段階ではアラビア半島起源説に傾いていた。

1.1. メソポタミア起源説

Wright (1890 : 5 - 6) によると、Alfred von Kremer は1875年に発表した論文の中で、セム系の諸言語にはラクダという語があるため、セム人がまだ1箇所に住んでいた頃からセム語にはラクダという語があったと考えられる述べている。一方、ナツメヤシの木と実、およびダチョウという語はセム語にはなかったと考え、ラクダがいて、ナツメヤシとダチョウがない地域を探し、中央アジアがセム語発祥の地であったと結論づけた。

イタリアのオリエント学者 Ignazio Guidi は1879年に発表した論考 “Della sede primitiva dei popoli Semitici” (セム人の原郷について) の中で、セム諸語における地形、土壌、季節、鉱物、動植物に関する語彙に基づき、次のように主張している。バビロニアはセム人が生活した最初の中心地である。原初のセム人はカスピ海の南部から南西部にかけての地域からの移住してきた。

同年に発表された論文の中で、Fritz Hommel も von Kremer や Guidi と同様、メソポタミア南部がセム人が最初に定住した地だという見解を表明している。

Wright (1890 : 6) はこれらの説を次のようにまとめる。セム人はクルディスタンの山岳地帯を経てティグリス河に達した。ティグリスを超えたセム人はティグリスとユーフラテスの間の平野に定住し、そこから2波に分かれた。一波はシリアを通過してカナンに至り、もう一波はバビロニアからアラビア半島に入り、やがてアフリカへと渡った。

1.2. アラビア半島起源説

Wright (1890 : 7 - 9) は自分自身はアラビア半島説によりひかれると述べた上で、4人の先行研究を引

用する。まず、A. H. Sayce は1872年に著した『アッシリア語文法』の中で、「セムの伝統から見て、セム人の原郷はアラビア半島である」と述べている。また、Aloys Sprenger は『アラブ人の古地理』(1875) と題する書物の中で「あらゆるセム人はアラブ人の織りなす層ではないか」と述べ、Eberhard Schrader は1873年にZDMGに発表した論文の中で「宗教、神話、言語、歴史、地理の状況から考えて、アラビアがセム性の原郷ではないか」と述べている。さらに、Michael Jan de Goeje は『セム民族の祖国』という書物の中で「山に住む者は平原に住んで遊牧民になつたりしないが、遊牧民はたえず農耕民になっている。そうした移住者がシリアとバビロニアの先住民を北へと追いやり、メソポタミア全体(アフリカの一部までも)がセム化したのではないか。」と述べる。その上で、Wright (1890 : 9) は「私自身はSchraderとde Goejeと同じくアラビア起源説の立場をとる」と述べる。

20世紀に入るとこのアラビア半島起源説は定説となり、Carl Brockelmann や Hans Bauer らも次のように述べている。「アラビア半島はアビシニア人も含めたセム人の原郷と見ることができる。」(Brockelmann 1908 - 1913 : 2) 「我々は現代の大半の研究者と同じくアラビア半島がこの(=セム人の)原郷であるとみなす。」(Bauer & Leander 1922 : 9)

アラビア語は音韻的、文法的に最も保守的なセム語と言われるため、この説には一見説得力がある。しかし、この説に対しても問題点が指摘され、その後いくつかの対案が示された。ここでは、複数起源説(1.3)、アフリカ起源説(1.4)、シリア・パレスチナ起源説(1.5)の3つを紹介する。

1.3. 複数起源説

Chaim Rabin (1963) は、アラビア半島から何波かの移民があったという当時の定説に疑問をもち、既存の言語間で言語的特徴が伝播したという対案を提示した。彼は次のような指摘をしている。

・これらの言葉は移民によって生じたわけではなく、もともとそこで話されていた言葉の間に言語的改新が伝播し、等語線が形成されるというよくあるプロ

セスによって生じた。(p.105)

- ・移民があった場合、移民の「波」ごとに言語が鮮明な境界をなし、言語的特徴が地理とは無関係な分布を示す(中央と辺境の区別がなく、系統関係のある特徴がとびとびに出現する)ことが多い。(p.105)
- ・それに対し、言語的特徴の伝播によって生じる言語地理においては、一貫性のある等語線が存在し、伝播の中央の見分けが付き、中央の言葉と辺境の言葉の間に違いが見られる。(p.105)
- ・単一の言語が移民の波によって別の場所にもたらされた結果、異なる「言語」が生じたのではなく、もともと一群の言葉が存在し、それらが共通の特徴を帯びるようになったことが明らかとなる。(p.115)

Rabinの想定する中央はアラビア半島～シリアで、周辺部は肥沃な三日月地帯(パレスチナ～ウガリト～メソポタミア)およびアフリカ大陸(エチオピア)の2つである。一般に中心は文化的・経済的に活発で、周辺部には古い特徴が残る傾向がある。

Rabinと同様の立場をとる研究者としてA. MurtonenやLutz Edzardがいる。Murtonenは「単一のセム祖語は存在しなかった可能性が高い」と述べる。Edzard(1998)は系統樹説の単一起源モデル(monogenetic model)に疑問をもち、対案としてカオス理論による複数起源モデル(polygenetic model)を提示している。系統樹説では、8ページの図のように、単一の祖語(Proto-Semitic)から複数の言語が分岐し(West SemiticとEast Semitic)分岐した言語(West Semitic)からさらに別の言語(Central Semitic, エチオピア語, 現代南アラビア諸語)が分岐したと考える。しかし、それには問題点もある。まず、系統樹説では言語数は時間の経過とともに幾何級数的に増えることになるが、それは事実と反する(むしろ、言語は減っている)。また、アラビア半島の人口はまばらで、半定住的であるため、移民を生み出す爆発的人口増加があったとは考えにくい、とEdzardは指摘する。

Edzardの対案は次のとおりである。図1のように、彼は初期状態としてカオスを想定し、それが収束(convergence)することによって語族が生じたと考える。すなわち、X-1、X-2、X-3... X-nの段階において各言語は無秩序に存在するが、言語接触によってそれらが共有する言語的特徴が増えると、X-1、X-2、X-3... X-nがひとつの言語グループとして同定されるようになるというのである¹。

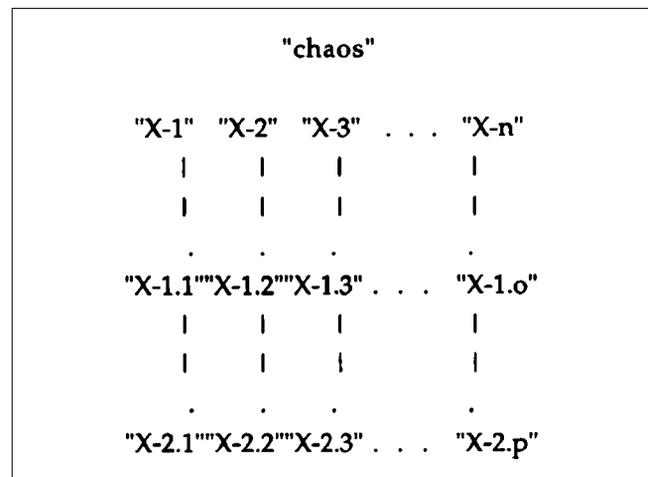


図1：カオスモデル (Edzard 1998)

1.4. アフリカ起源説

セム語とエジプト語の関係は19世紀から話題になっており(Adolf Ermanなど、詳しくはSatzinger 2002参照)、20世紀中頃にはセム語をアフロアジア大語族の一員と位置づける見方が登場した(Marcel Cohen, Joseph H. Greenberg, I. M. Diakonoffなど)。この見方に立てば、セム語はアフリカ起源と考えるのがもっとも自然である。アフロアジア大語族に属する言語はセム語以外すべてアフリカの言語であるからだ。これを学説として最初に打ち出したのがI. Diakonoff(1965)である。当時、Diakonoffはセム・ハム祖語の原郷をサハラ地域と考え、アラビア半島説を否定した。この説への賛同者としては、前述のMurtonen(1967)²やChristopher Ehretらの名をあげることができる。

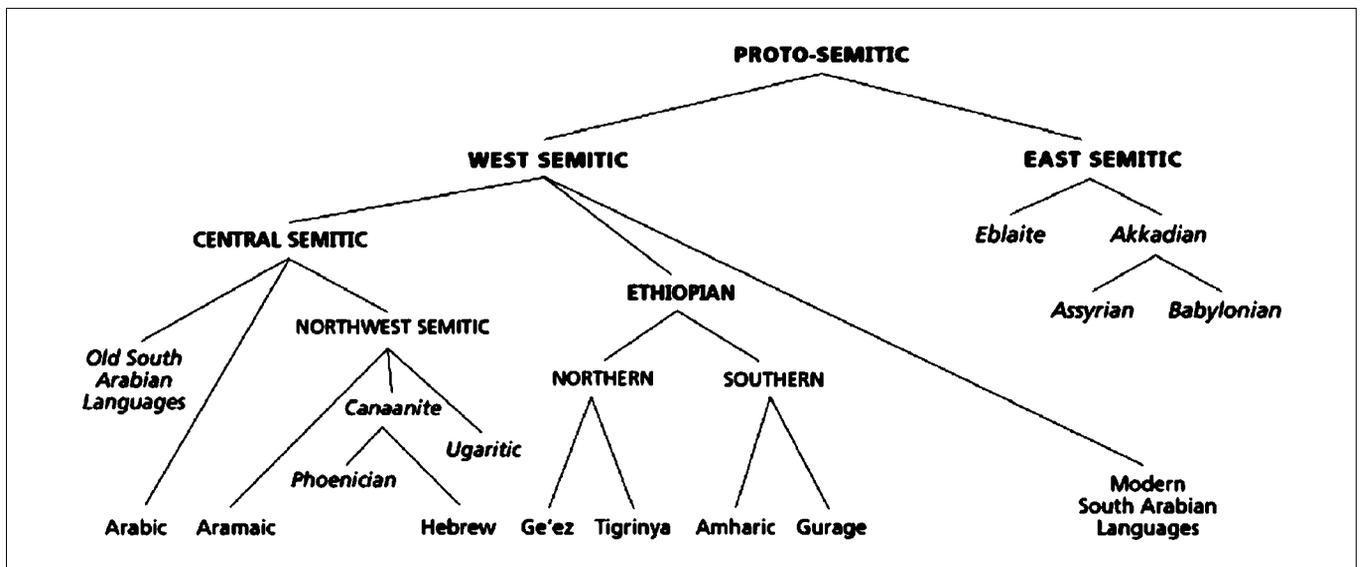
1.5. シリア・パレスチナ説

最後に紹介するシリア・パレスチナ説は1960年にPelio Fronzaroliによって提案されたものである。Fronzaroliは先史学の成果に基づき、セム人の原郷は農耕の発達したシリア・パレスチナ地域にあり、遊牧生活はその後の成り行きであったと考えた。これを言語学の立場から検証したのがWitold Tyloch(1975)である。Tylochはセム祖語に再建される語彙に基づき、セム人は当初から少なくとも一部は定住民であり、農耕に関する知識があったという結論に達している。

この説を再評価したのが、Diakonoff(1998)および

¹カオス理論はとくにアラム語によく当てはまる。アラビア語、クルド語、ペルシア語、トルコ語の影響を受けた現代アラム語の発生は系統樹説よりも収束とエントロピーによってうまく説明がつくという。

²Murtonenはその後(1991)上述の複数起源説へと立場を変えている。



<http://www.bartleby.com/61/JPG/tree.jpg>

び Diamond & Bellwood (2003) だと言える。Diakonoff は1998年に出版された論文で前述のアフリカ起源説を修正し、セム語の原郷をナイルデルタからパレスチナの間としている。Diamond & Bellwood は Science 誌に発表した論文の中で、次のように述べる。アフロアジア大語族は6つの枝なら成るが、そのうち5つが北アフリカに限定され、ひとつ(セム語族)は西南アジアにのびている。この分布からすると、アフロアジア大語族はアフリカ起源で、セム語はそこから西南アジアに広がったと考えるのが順当である。ところが、考古学的に確認される新石器時代以降の作物と家畜の流れはアフリカ発ではなく、西南アジア発なのである。そうだとすると、言語がこの流れに逆らって広がったというのは考えにくい³。

2. 比較言語学から見たセム語の原郷

2.1. Linguistic Migration Theory

Linguistic Migration Theoryとは、語族の下位分類(語派)とその地理的分布をもとに語族の原郷を探る方法で、その基本的な考え方は次の通りである。

Model of maximum diversity and minimal moves

語族が分岐していく際に、娘言語はもとあった場所の近くに残る可能性が高く、遠くまで移動したり、何度も移動したりする可能性は低い。(Campbell 1999, p.105)

Center of gravity model 多くの上位語派が混

在する地域がその語族の原郷である可能性が高い。(ibid.)

この方法をセム語に適用し、セム語の center of gravity を探ってみよう。

2.2. 再建語彙から原郷を探る

セム祖語の再建をおこなうと、再建された語彙の中から原郷に関する手がかりが見つかる場合がある。この方法は印欧語では19世紀中頃から試され、一定の成果を収めた。基本的な考え方は次の通りである。

一般に同系の(ほとんど)すべての言語で偶然同じ語が借用される可能性は皆無に近い。

一般に同系の(ほとんど)すべての言語で規則的に対応する語彙は祖語から引き継がれたと考えられる。一般に借用語は規則的に対応しない。

一般に祖語に再建される語彙は祖語の話された地域の自然環境や文化を反映している。

この方法をセム語に当てはめるには、まずセム祖語の語彙を再建する必要がある。上で述べたように、この作業はすでに Tyloch (1975) によってなされている。しかし、それから30年以上の時間が経過しているため、Tyloch の研究は再検討を要する。個々の言語の語彙に関する情報が飛躍的に増えたこともあるが、最大の問題点はセム語系統樹におけるアラビア語の位置付けの変化である。1975年当時、アラビア語は南セム語に帰属すると考えられており、Tyloch もそれに従っているが、現在は北西セム語とともに中央セム語派をなすとされる。前提となる系統樹が異なれば、祖語の再建にも影響する。したがって、個々の語について再建をやりなおし⁴、その上で原郷に関する手がかりを探る必要がある。

³これに対する反論として Ehret et al. (2004) がある。

⁴一部の語については、Semitic etymological dictionary (Militarev & Kogan 2000, 2005) の成果を利用することができる。

今回あらためて再建した語彙の一部を下にあげる。これらを見ると、セム祖語の話し手は地を耕し(1) 種をまき(2) 穀物をあおぎ分けていた(3) ことが分かる。作物には大麦(4) 小麦(5) 雑穀(8) があり、それをひいて(6) 粉(7) にしていた。近くにクミンが生え、アーモンド、テレピン、イチジク、ナツメヤシ、ブドウの木もあり、実を食べたり、酒を作ったりしていた。(ハチ) ミツも食べた。また、ウシ、ロバ、ヒツジ、ブタ、ヤギ等の大小の家畜を飼っていたようだ。

1. *ḥrī “to plow” — **Akk.** erēšu “to sow, cultivate”, **Ug.** ḥrī, **Heb.** ḥōraš, **Syr.** ḥrat “to furrow”, **Arab.** ḥaraṭa, **Eth.** ḥarasa.
2. *dṛf “to sow” — **Akk.** zarû “to winnow, scatter, sow”, **Ug.** dṛf, **Heb.** zṛf, **Syr.** zraḥ, **Arab.** ḍaraḥa, zaraḥa, **ESA** dṛf, **Eth.** zarḥa.
3. *dṛw “to winnow” — **Akk.** zarû “to winnow, scatter, sow”, **Ug.** dṛw, **Heb.** zṛh, **Syr.** draḥ, **Arab.** ḍarā “to scatter”, **ESA** dṛw “to scatter”.
4. *šīār- “barley” — **Akk.** [šeʔu], **Ug.** šīrm, **Heb.** šforō, **Syr.** sīār(t)ā, **Arab.** šaīr, **ESA** šīr, **Eth.** [šornāy “wheat”] cf. šāīr “herb, grass”.
5. *ḥiṭ- “wheat” — **Akk.** uṭṭatu “grain, barley”, **Ug.** ḥṭt, **Heb.** ḥiṭṭō, **Syr.** ḥeṭṭatā “(grain of) wheat”, **Arab.** ḥiṭat-, **Eth** ḥeṭat (?).
6. *ṭḥn “to grind” — **Akk.** ṭēnu, **Ug.** ṭḥn, **Heb.** ṭḥan, **Syr.** ṭḥen, **Arab.** ṭaḥana, **ESA** ṭḥn “flour”, **Eth.** ṭaḥana.
7. *qamḥ- “flour” — **Akk.** qēmu, **Ug.** qmḥ, **Heb.** qemaḥ, **Syr.** qamḥā “flour, meal”, **Arab.** qamḥ- “wheat”, **Eth.** qamḥ “to eat grain”.
8. *duḥn- “millet” — **Akk.** duḥnu, tuḥnu, **Heb.** doḥan, **Syr.** duḥnā, **Arab.** duḥn-.
9. *šVnbal-at- “ear (of corn)” — **Akk.** šubultu, **Ug.** šblt, **Heb.** šibboleṭ, **Syr.** šebbelā, **Arab.** sunbul-, sabal-, **ESA** sḥblt, **Eth.** sabl.
10. *kammūn- “cumin” — **Akk.** kamūnu, **Ug.** kmn, **Heb.** kammon, **Syr.** kammūnā, **Arab.** kammūn-, **Eth.** kamin, kamin, kāmīn, kamun, kamen.
11. *taḳid- “almond (tree, nut)” — **Akk.** šiḳdu, šuḳdu, siḳdu, **Ug.** tqd, **Heb.** šōḳed, **Syr.** šegdā, **Eth.** səgd.
12. *buṭn- “terebinth (tree, nut)” — **Akk.** buṭnu, buṭumtu, **Heb.** boṭno “pistachio”, **Syr.** beṭm(t)ā “oak, terebinth”, **Arab.** buṭ(u)m-, **Eth.** bətm, butm.
13. *tiṭn-at- “fig (tree)” — **Akk.** tittu, **Heb.** tīeno, **Syr.** tiṭntā, tittā, **Arab.** tīn-.
14. *tam(a)r- “date (palm)” — **Akk.** [gišimmaru], **Ug.** ta-[ma?-ru?], **Heb.** tōmōr, **Syr.** tmartā, **Arab.** tamr-, **Eth.** tamr.
15. *ṣinab- “grape” — **Akk.** inbu “fruit” (cf. ḥanābu “to sprout”), **Ug.** ḡnb(m), **Heb.** ṣenōb “wineberry”, **Syr.** ṣenb(t)ā “berry, grape”, **Arab.** ṣinab-, **ESA** ṣnb “vineyard”.
16. *gapn- “vine” — **Akk.** gupnu “tree”, **Ug.** gpn “vine, vineyard”, **Heb.** gēpen “climbing plant, vine”, **Syr.** gufnā “vine”, **Arab.** ḡafn- “grapevine”, **ESA** gpnt “vine”.
17. *karm/n- “vineyard” — **Akk.** karānu “wine, grapevine, grapes”, **Ug.** krm, **Heb.** kerem, **Syr.** karmā “vineyard, vine”, **Arab.** karm- “vine, grapes, vineyard”, **Eth.** kərm “vine”.
18. *dib(a)š- “honey, date-syrup” — **Akk.** dišpu, **Heb.** dbaš, **Syr.** dbaš, debšā, **Arab.** dībs- “syrup”, **Eth.** dbs (epigraphic).
19. *šikar- “alcoholic beverage” — **Akk.** šikaru “beer”, **Heb.** šekōr “intoxicating drink, beer”, **Syr.** šakrā “intoxicating drink”, **Arab.** sakar “intoxicating drink”, **Eth.** səkār “intoxicating drink”.
20. *wayn- “wine” — **Akk.** [īnu (jB lex.)], **Ug.** yn, **Heb.** yayin, **Syr.** aaa, **Arab.** aaa, **ESA** wyn, yyn “vineyard”, **Eth.** wayn “vine, wine, grapes”.
21. *ʔalp- “cattle” — **Akk.** alpu “bull, ox; (head of) cattle; beef”, **Ug.** alp “(head of) cattle; bullock; yearling calf, young (head of) cattle”, **Heb.** ēlep “cattle”.
22. *liʔ(-at)- “bovine” — **Akk.** littu “bovines (of both sexes and all ages)”, **Heb.** leʔō (?), **Arab.** lāʔan “wild bull, buffalo”, **MSA** léʔ “cow” (Jib.).
23. *ṭawr- “bull” — **Akk.** šūru, **Ug.** ṭr, **Heb.** šor “one single beast, bovid”, **Syr.** tawrā, **Arab.** ṭawr-, **ESA** ṭwr, **Eth.** sor, šor.
24. *šāʔn- “small cattle” — **Akk.** šēnu “sheep and goat”, **Ug.** šin “ewe, small cattle”, **Heb.** šōʔn “sheep”, **Syr.** šānā, **Arab.** dāʔin- “sheep”, **ESA** šʔn “sheep”.
25. *ḥimār- “he-donkey”ḥ — **Akk.** imēru, **Ug.** ḥmr, **Heb.** ḥāmor, **Syr.** ḥmārā, **Arab.** ḥimār, **ESA** ḥmr.
26. *ʔatān- “donkey mare” — **Akk.** atānu, **Ug.** atnt (pl.), **Heb.** ʔoton, **Syr.** ʔattānā, **Arab.** ʔitān-.
27. *šaw- “sheep” — **Akk.** šuʔu, **Ug.** š “ram, sheep”, **Heb.** še “small livestock beast (both sheep and goats)”, **Arab.** šāʔ “ewe”, **ESA** sḥh, **Eth.** *čaw(?)- “(meat of) small cattle”.
28. *ʔimmar- “lamb” — **Akk.** immeru “sheep; sheep and goats; ram”, **Ug.** imr, **Heb.** ʔimmer, **Syr.** ʔemrā, **Arab.** ʔa/ʔimmar-.
29. *raḥil- “ewe” — **Akk.** laḥru, **Heb.** roḥel, **Arab.** riḥl(at)-.
30. *ḥV(n)zīr- “pig” — **Akk.** [šaḥû] cf. Ass. ḥuzīru, **Ug.** ḥuzi-rū, **Heb.** ḥāzīr “swine, boar”, **Syr.** ḥzīrā “hog”, **Arab.** ḥinzīr-, **Eth.** ḥanzīr “pig, wild boar”.

31. *šinz- “goat” — **Akk.** enzu “she-goat, goat”, **Ug.** šz “caprine animal, kid, goat”, **Heb.** šez, **Syr.** šezzā, **Arab.** šanz-, **ESA** šnz

これらの語がセム祖語に存在するのは、セム語の原郷で農耕や牧畜がおこなわれていたからにはほかならない。したがって、セム語の原郷はそれが可能な場所であったと考えられる。言い換えるなら、比較言語学から見るとビシュリ山系は「セム語族」の原郷ではなさそうである。無論、これはビシュリ山系がセム系一部族の原郷である可能性を否定するものではない。

参考文献

- Brockelmann, C. (1982) *Grundriß der vergleichenden Grammatik der semitischen Sprachen* 1-2. Hildesheim: Georg Olms (repr. of 1908-1913 edition).
- Campbell, L. (1999) *Historical linguistics: An introduction*. Second edition. MIT Press.
- Diakonoff, I. (1965) *Semito-Hamitic languages: an essay in classification*. Moscow: Nauka Pub. House.
- Diakonoff, I. (1998) “The earliest Semitic society: Linguistic data.” *Journal of Semitic Studies* 43, 209-219.
- Diamond, J., and P. Bellwood (2003) “Farmers and their languages: The first expansions.” *Science* 300, 597-603.
- Edzard, L. (1998) *Polygenesis, convergence, and entropy: An alternative model of linguistic evolution applied to Semitic linguistics*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Ehret, C. (1996) *Reconstructing Proto-Afroasiatic (Proto-Afrasian): Vowels, tone, consonants, and vocabulary*. University of California Publications in Linguistics, 126. Berkeley: University of California Press.
- Ehret, C., et al. (2004) “The origins of Afroasiatic.” *Science* 306, 1680-1681.
- Fronzaroli, P. (1960) “Le origini dei Semitico come problema storico.” *Accademia nazionale dei Lincei. Rendiconti della Classe di scienze morali, storiche e filologiche* 15, 123-144.
- Isserlin, B. S. J. (1975) “Some aspects of the present state of Hamito-Semitic studies.” In: J. Bynon and Th. Bynon (eds.), *Hamito-Semitic*, 479-485. The Hague: Mouton.
- Lipiński, E. (2001) *Semitic languages: Outline of a comparative grammar*, Second edition, Leuven: Peeters.
- Militarev, A. and L. Kogan (2000) *Anatomy of man and animals*. Semitic etymological dictionary, vol. 1. Munster: Ugarit-Verlag.
- Militarev, A. and L. Kogan (2005) *Animal names*. Semitic etymological dictionary, vol. 2. Munster: Ugarit-Verlag.
- Murtonen, A. (1967) *Early Semitic: A Diachronical inquiry into the relationship of Ethiopic to the other so-called South-East Semitic languages*. Leiden: E.J. Brill.
- Murtonen, A. (1991) “On proto-Semitic reconstructions.” In: A. Kaye (ed.), *Semitic studies in honor of Wolf Leslau on the occasion of his eighty-fifth birthday*, 1119-1130. Wiesbaden: O. Harrassowitz.
- Orel, V. and O. V. Stolbova (1995) *Hamito-Semitic etymological dictionary: Materials for a reconstruction*. Leiden; E.J. Brill.
- Rabin, Ch. (1963) “The origin of the subdivisions of Semitic.” In: D. W. Thomas and W. D. McHardy (eds.), *Hebrew and Semitic studies presented to G. R. Driver*, 104-115. Oxford: Oxford University Press.
- Satzinger, H. (2002) “The Egyptian Connection: Egyptian and the Semitic Languages.” *IOS* 20, 227-261.
- Tyloch, W. (1975) “The evidence of the proto-lexicon for the cultural background of the Semitic people.” In: J. Bynon and Th. Bynon (eds.), *Hamito-Semitic*, 55-61. The Hague: Mouton.
- Wright, W. (1890) *Lectures on the comparative grammar of the Semitic languages*. Cambridge: Cambridge University Press (repr. Piscataway: Gorgias Press, 2002).

「<シュメール文字>文明」のなかの「語彙リスト」

前川和也 (国士舘大学21世紀アジア学部)

計画研究「<シュメール文字文明>の成立と展開」研究代表者

「<シュメール文字>文明」は、「漢字文明(圏)」、「漢字文化」に触発されて、わたしが作りだした語である。それは広義には、シュメール人が発明した粘土板文字記録システムによって支えられたメソポタミア文明全般を指示するが、より狭義には、もっともはやくて前4千年紀末、おそくても3千年紀中葉までにかけてメソポタミア、シリア各地で成立し、前2千年紀のはじめまで繁栄をつづけた都市(国家)群の文明装置をさす。われわれの計画研究「<シュメール文字>文明の成立と展開」では、この語は、後者の意味で用いられている。そしてこの「<シュメール文字>文明」の推移を象徴的に示しているのが、「語彙リスト」lexical listsの<成立と展開>なのである。

前4千年紀後半、いわゆるウルク期中期から後期にかけて、メソポタミア最南部地方のウルクは都市化の速度をあげたようである。とりわけウルク後期にはいると、セトゥルメント中核に位置するエアンナ地区でつぎつぎに大規模な公共建造物が成立した。またウルク自体も他セトゥルメントを圧倒する規模を有していた。さいきんニッセンは、遺跡内で実施されたサーヴェイにもとづいて、これまで想定されていた100ヘクタールをはるかにこえるウルク後期の居住面積250ヘクタールを提示して、人口を20,000~40,000人と見積もっている(Nissen 2002)。彼はかつてアダムズとともに、ウルク周辺地方のセトゥルメント調査を行っていたが、いまや彼は、じっさいにはウルク後期には、サーヴェイ当時考えていたよりもはるかにおおくのセトゥルメントがウルク周辺に成立していたと推定し、セトゥルメント群は4レベルに階層化されていたとする。またすでに彼は、ウルクから多数出土する粗製土器BRBを、大公共建造物の建設労働者への食糧配給のための容器と解して、当時、強大な政治権力のもとで大規模な人的動員が行なわれていた証拠とみなしていた。いまも彼は、この考えをかえていない。なおウルクは、ウルク中期頃から、イラン、シリア、トルコ南部と活発な交易活動を行ない、おどろくほど多量の鉱物などを輸入していた。シリアのいくつかの大セトゥルメン

トには、短期間ではあれ、ウルク人みずからが植民していた可能性がある(Algaze 2001; id. 2007)。

このような状況のもと、ウルクにおいて、ウルク後期最末期(エアンナ a層時代)にいたって、粘土板による文字記録システムが成立するのである。記録システムは、つぎのエアンナ 層時代(ジェムデト・ナスル時代)にウルクにおいてさらに精密化されるとともに、すくなくとも南部メソポタミアをこえてディヤラ流域地域にまで普及していく(Nissen 1986)。また文字記録とともに、円筒印章による押印システムも確立し、さらに 層時代までのウルクでは、円筒印章いがいにも、「ウルクの大杯」に代表されるような、支配者や公共組織を描いた工芸作品もおおく製作されている。まことにこれらは、ウルクにおいてこの時期までに国家形成が完了したことを示している。¹

a、 層のエアンナから出土した粘土板は5000点をはるかに超えているが、うち約85パーセントは、行政記録 administrative records、のこりは「語彙リスト」lexical listsである。ウルクでは、大組織を日常的に管理・運営するために、粘土板記録が作られはじめたのである。大組織は、文書による記録がなければ維持できないほど、複雑化していたといつてよい。よく誤解されるように、たんにモノを勘定するためだけに粘土板に数字や文字が書かれたのではない。文字記録システムは、いわば大組織の行政過程をまるごと情報化するために、 a層時代にはいつてごく短期間に作りだされた。²

南部メソポタミアでの国家形成の過程は、セトゥルメント内部での社会、経済の複雑化から説明するのがもっとも妥当であろう。さいきんティモシー・アールにしたがって関雄二が説得的に描いたように(関2006)、国家形成の最終局面では軍事、経済、イデオロギーという3<権力装置>の掌握が決定的に重要となる。それは、どの<権力装置>をどの程度掌握できるかによって、生まれてくる国家の形態がまるで異なつたことを意味する。メソポタミアにおいては、国家形成ほぼまちががなく、経済の<権力装置>獲得を核として進行した。³ だから、その最終段階で成立した文字記録システムも、メソポタミアでは、他の地域と異

なって、行政・経済システムの円滑な運営を行なうことを第一にめざしていた。じっさい、メソポタミアで王の功業を記録する政治的テキストが書かれはじめるのは、前3千年紀前半までまたなければならない。また広い意味での宗教文書、文学作品も、おそらくその時期に、あるいは少し遅れて成立したようである。⁴

ドイツ隊のウルク発掘によって1920年代末から30年代のはじめにかけてエアンナ地区から出土した「古拙的な」archaische 粘土板テキスト群は、ファルケンシュタインによって1936年に公刊された（Falkenstein 1936）。なおオックスフォード隊によってシュメールに北接するアッカド地方の小遺跡ジェムデト・ナスルで発見された「絵文字的な」pictographic粘土板群も、すでに出版されていた（Langdon 1928）。現在は、ウルク「古拙文書」は、ほとんどがエアンナ a₁ 層時代、一部が 層時代に書かれたと理解されており、また文書が出土したジェムデト・ナスルの公共建造物は、ウルク・エアンナ 層期とほぼ同じ時代と推定されている。そして、ここで特筆すべきは、南部のウルクと北部ジェムデト・ナスルで出土する諸文書のあいだで、文字体に大きなちがいは存在しないという事実である。文字を構成するラインにはまだ曲線もめだつが、粘土板への直線首部の刻みこみは、しばしば、ほとんど「楔」状になっているように見える。これらのサインは、すぐのちになって真正の「楔形文字」cuneiformに発展していくから、たしかにこれらは「原楔形文字」protocuneiformと定義されてよい。なお、ときにウルクやジェムデト・ナスル文書だけでなく、前3千年紀中葉（初期王朝 期）に成立する文書群さえも、「古拙文書」とよばれることがあるが、すくなくともこの呼称は、ウルク a₁ 層時代の諸文書に限定して用いられるべきであろう。また、たとえ文字体じたいは「古拙的」とよべるとしても、これらの粘土板に見える書法は驚くほど精密であり、また文書からはきわめて複雑化した経済・社会システムが想定できる。

すでにファルケンシュタインは、ウルク文書群は行政記録だけでありたっているのではないことを知っていたが、行政文書いがないのテキスト（しばしば当時は「学校文書」school textsとよばれていた）に本格的な関心がよせられたのは、はるかのちになってからのことである。

1960年代中葉になって、シュメール中部のアブ・サラピク（古代名ケシュ？）から前3千年紀中葉の粘土板群が発見され、それらのほとんどが書記養成のため

の諸文書（「学校文書」）や文学テキストであることが理解された。しかもそれらは、すでにおなじ中部のファラ遺跡（シュルツパク市とされる）で出土していた文書としばしば同一内容であることも証明されたし、さらにそれらの一部は内容的にウルク a₁ 層時代に書かれた「古拙的」粘土板にさかのぼることも気づかれはじめたのである。また第2次大戦後再開されたウルク発掘によって、ふたたび古拙文書が出土し、「語彙リスト」の数も飛躍的に増大した。そして決定的であったのは、1970年代中葉に、シリア南西部の大遺跡テル・マルディク（古代名エブラ）の王宮文書庫（前3千年紀中葉）が発掘されて、ファラやアブ・サラピク文書と同一内容の文書、さらにウルク a₁ 層時代の「古拙文書」と同一内容の粘土板がおおく見出されたことである（Pettinato, 1981 [MEE 3]; Nissen 1981; Michalowski 1987）。そして1980年代には、ニッセン、グリーン、ダメロフ、エングルンドらがウルク「古拙文書」にかんする研究プロジェクトをたちあげた。彼らベルリン・グループは1987年以降、新「古拙文書」をつぎつぎに公刊するとともに、かれらの研究成果を公表しつづけている。エングルンドが1998年に公刊した論文は、彼らの仕事のみごとな総括である（Englund 1998）。

エアンナ a₁ 層時代のメソポタミア各地から出土した「古拙文書」はおそらく6000点ちかくに達しており、そしてそのうち少なくとも約670点は「語彙リスト」lexical listsである。「語彙リスト」は、基本的には、あるひとつのカテゴリーに属する少なくとも数10個の語が、当時の60進法度量衡システムで基本ユニットを示す数字N₁（とうぜん含意は「1」）とともに列挙される粘土板をさす。たとえば研究者が「都市」Citiesリストとよんでいる文書の冒頭4行は、つぎのように記録されている。1)N₁ URI₁(ŠEŠ.AB)2)N₁ NIBRU(EN.LIL₂)3)N₁ ARARMA₂(UD.AB)4)N₁ UNUGa。それぞれ都市ウル、ニッブル、ラルサ、ウルクを示しているのである。ただのちに述べるように、ベルリン・グループの研究者たちが「貢納」Tributeと定義したリスト（フェルトホイスらはより中立的な呼称Word List Cを用いる）は、この原則からはおおきく外れるし、また「容器」Vesselsリストでは、「容器」いがない、「衣服」類も列挙される。なお 層時代にはリスト末尾に、リスト内の「行」総数をも示した、いわば「コロン」が書かれるのが原則だったようである。

「語彙リスト」lexical listsは、前2千年紀前半のメ

ソポタミア各地、とりわけニップル都市から大量に出土しはじめる「語彙テキスト」lexical texts とは区別される。後者では、おおくのシュメール語彙（および、ときにその読みにかんする指示）にアッカド語訳が付されることが原則であったようである。シュメール語彙のみが記録されているケースでも、実在するアッカド語訳が文書にあらわれていないだけだと考えられる。だから、そのような、シュメール語彙だけを記した文書には、Proto-を付した呼称が与えられているが（たとえばProto-Lu）これはかならずしも正確ではない。いっぽう「語彙リスト」には、あ

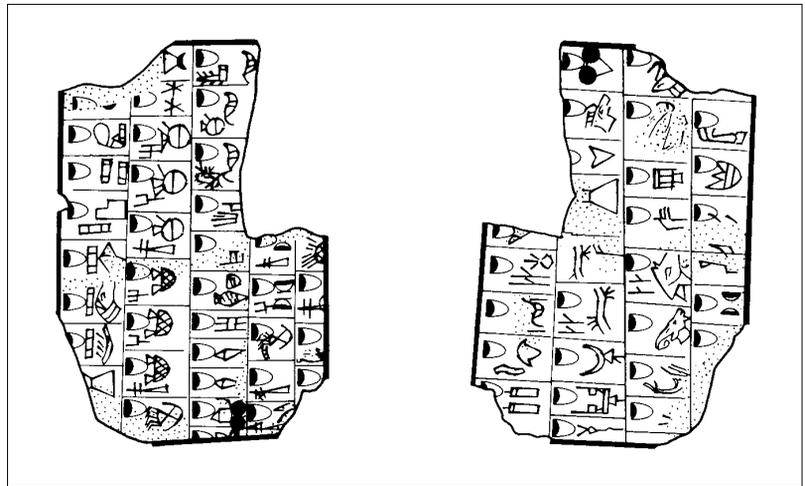


Fig. 1 : ED Lu A リスト W 9656, h (a; Englund-Nissen 1993:Tafel 23)

たりまえのことながら、アッカド語訳は存在しない。さらに「語彙リスト」と「語彙テキスト」とは、内容的にはまったく連続していない。けれども、ともに、ある原理にしたがって多数のシュメール語彙を並べていくのであるし、そのような<語彙集>が成立した理由も、ほとんど共通している。それらは書記生の養成、訓練のために必要であった。だから模範あるいはモデルとして書記教育の教材として利用されたリスト、テキストのほかに、書記生が教材内のいくつかの「行」を練習した小粘土板もおおく出土している。

エングルンドによれば、エアンナ a、層の時代、すなわちウルク期最末期およびジェムデト・ナスル時代のウルクではつぎのような「語彙リスト」が成立したという（Englund 1998: 88-89. 括弧内はEnglund-Nissen 1993: 12で採用されていた表現）、「職業」Lu₂ A: namešda (Lū A)、「容器」Vessels (Gefäße (Vessels))、「貢納」Tribute (Tribut (Tribute))、「金属」Metal (Metall (Metal))、「木」Wood (Bäume (Tree, Wood))、「牛」Cattle (Rinder (Cattle, Animals))、「官職」Officials (Beamte (Officials))、「魚」Fish (Fische (Fish))、「都市」Cities (Städte (Cities))、「地理」Geogr. (Geographie (Geogr.))、「穀物」Grain (Nahrung (Food, Grain))、「鳥」Birds (Vögel (Birds))、「植物」Plants (Pflanzen (Plant))、「豚」Pigs (Schweine (Swine, Dog))、「語彙集」Vocabulary (Vokabular (Vocabulary))。なおフェルトホイスは、「語彙集」と「豚」をリストから除外している（Veldhuis 2006: 186）。

現在のところ、ウルク・エアンナ a 層時代にさかのぼることができるのは、「職業」(ED Lu A)、「容器」、「金属」、「都市」リストである。そしてそれらの数もけ

っしておおくない。その他の「語彙リスト」はつづく層時代から出土しはじめる。粘土板表面に「職業」リストED Lu A (の一部?) が、裏面に「金属」が書かれるという稀有の例もある（W 11986 a [Englund-Nissen 1993: Tafel 4]; Veldhuis, DCCLT: 2）。

リストのなかでは、「職業」リストED (= Early Dynastic) Lu Aがもっともおおく出土する。このリストに与えられた呼称は、古バビロニア時代に成立したリスト（ふつうOB (= Old Babylonian) Proto-Luとよばれる）や、前1千年紀にいたって完成するリスト（Lu = ša）にちなむ。前者には職業、身分など、社会的存在としての人間の諸状態を示す諸語が900ちかく集められている。そしてリストは、「人」をあらわすシュメール語 lu₂ではじまっているのである。後者すなわちLu = šaでは、最初の7行に lu₂と、それに対応するアッカド諸語 *ša₂-a, šu-u₂, ma-am-ma, šar-ru, be-lum, a-hu, a-mi-lu* が列挙されている。現存の古バビロニア期 Lu (OB Proto-Lu) のほとんどには、シュメール語だけがみえるけれども、「原」テキストではそれぞれのシュメール語にアッカド語が対応していたことは明白である。OB Proto-Luでは、単一シュメール語彙が連続して複数行に書かれることがある。これは、本来、それらに異なったアッカド語訳が与えられていたからにはほかならない。またこの時代に成立した文学作品（Edubba D: Civil 1985）のなかで、ある書記学校生徒が、「わたしはInanna-teš₂ <人名リスト>からはじまって、「平原の生物」(をへて) Lu = šaの終わりまでのすべての行を書いてきました」と答えている。⁵ 彼は、職業リストOB Luをシュメール・アッカド語彙リストであると明言しているのである。

ED Lu Aにはエアンナ a 層時代に書かれた断片がいくつかのこっており（Fig. 1）またつづく層時代のウルクからも、160点ちかくのテキストが発見されてい

る (Fig. 2)。発見されたテキスト総数は、現存の諸リストのなかできわだっておおい。さらに重要なことは、その後古バビロニア時代まで、このリストは、南メソポタミアのみでなく、北メソポタミア、シリア、イラン各地で、当初の語彙の順序をけって変えることなく、書き続けられていたという事実である。だから、いまや原テキストのほとんどすべての行を正確に復元することができる (Fig. 3)。

キシュ近郊ジェムデト・ナスル (エアンナ 層時代) 文書群からは ED Lu A はみつからないが、同時代の南部メソポタミア遺跡から出土したとされ、1990年代中葉に古物市場に出まわった400枚以上にのぼる文書群には、まちがいなくこのリストが存在している (MS 2429/1-4)。⁶ さらにウル (初期王朝期 期 [e.g., UET 2

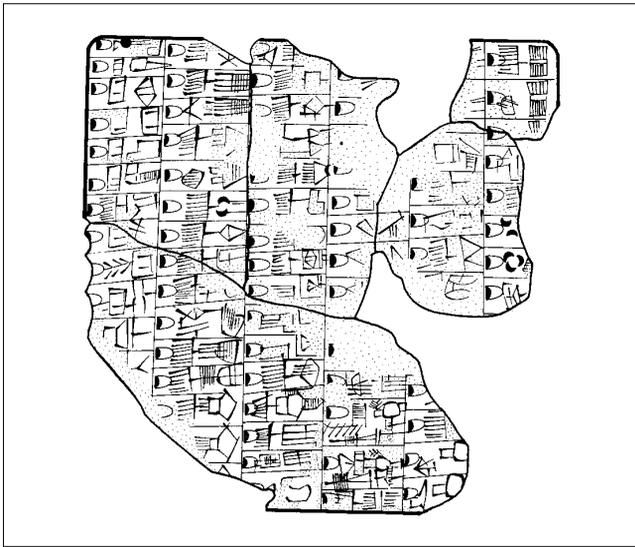


Fig. 2: ED Lu A リスト W 20266,1 表面部 (; Englund-Nissen 1993:Tafel 2)

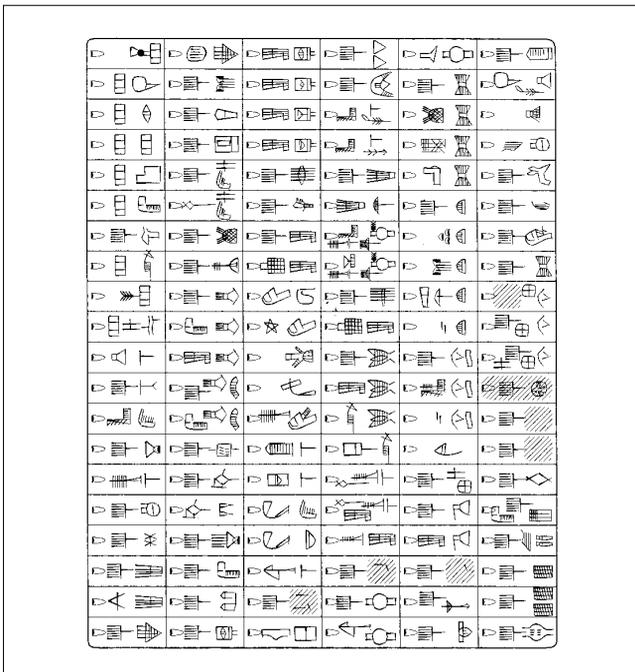


Fig. 3: ED Lu A リスト復元 (Englund-Nissen 1993:17, Abb. 4)

14) ファラ (e.g., SF 33)、アブ・サラビク (e.g., OIP 99 1)、ラガシュ (DP 337)、ニップル (ECTJ 220) (以上ともに初期王朝期 期)、ニップル (OSP 1 11)、アダブ (Ad 746 [Istanbul])、ラガシュ (Schileico, ZA 29 79: 6 面体ブリズム) (以上ともにアッカド期) など、シュメール地域から出土するだけでなく、シリア南西部のエブラ (メソポタミア編年の初期王朝期 期 [e.g., MEE 3 1])、イランのスサ (アッカド期 [MDP 14 88])、北メソポタミアのナガル (テル・ブラク) (おそらくエブラ文書の時代と同時期 [Michalowski 2003]) でも発見されている。エブラにかんして注目されるのは、真正の ED Lu A リストがみついているだけでなく、Lu A から文字サインが抜き出され、さらにそれらにセム語的な特徴をもつ「読み」がふられているテキストも存在するという事実である (Archi 1987; Civil-Rubio 1999: 265; Michalowski 2003: 2)。そして古バビロニア時代のキスラ (FAOS 2/1 pl. 92)、ウル (e.g., UET 7 86)、ニップルで、知られるかぎりでもっとも新しい Lu A リストが発見されている。ニップルではシュメール語人名リストと Lu A の一部が同一粘土板に書かれているほか (SLT 113)、ED Lu A や「貢納」リスト (ペティナートやフェルトホイスのいう Sumerian Word List C) が、粘土製ブリズム (6 面体) として製作されていた (YOS 1 1; Veldhuis-Hilprecht 2003-2004: 45-46; Veldhuis 2004: 91-92, 377 Pl. 35)。

残念なことに、われわれはまだ、ED Lu A で列挙されている「職業」名すべての意味を理解しているわけではない。ただ、職業名のおおくには「大」を意味する GAL サインが付されているから、リストが重要な官職を列挙していることだけは、まちがいない。さてこの職業リスト冒頭にあらわれる ŠITA.GIŠ.NAM₂ は、のちの「語彙テキスト」で「王」šarru とアッカド語訳されることがあるから (MSL 12 93 [Canonical lu = ša]: 26; MSL 14 248 [Ea]: 36-37) ED Lu A の集成、公刊に力をつくしてきたニッセンは、これこそが当時のウルク王をあらわす語であることを、当初から一貫して主張している (Nissen 1988: 94-95; Nissen-Damerow-Englund 1996: 111)。⁷ もしこの考えが認められるのであれば、この官職表は当時の大組織のなかの重要官職がほぼすべてランク付けされて、記録されているということになる。わたしは、このような説明には懐疑的である。なによりも、リスト冒頭の官職は、同時代の行政文書には、ほとんどあらわれない。いっぽうで、当時のウルク行政文書にも言及され、後のウルクやシリア・エブラなどの都市において支配者の意味で用いられつづけた語 en は、このリストには言及されていないのである。

ED Lu Aにみえる官職群が現実の世界をどこまで示しているかという問題は、ウルク「語彙リスト」全般と行政文書とがどのように関係しているかというふうに、一般化することができる。それを典型的に示しているのは、「容器」リスト(Englund-Nissen 1993: 29, Abb. 12; Englund 1998: 97, Fig. 29)である。このリストの冒頭には、当時のウルク・エアンナ地区で無数に発見され、労働者への食料配給に用いられたと解釈される粗製土器BRB(ニッセン)を形象したサインが、そしてつづいて、DUGサイン(のちにはdugと読まれ、「土器」・「容器」全般を示した)があらわれる。そして第5、7サインは、それぞれ、のちのŠAKIR、LAHTANサインにつながっていくようにみえる。これらは、乳製品作りに用いられる容器を示す。いっぽうでこのリストでは、さらにDUGとさまざまなサインとが組みあわされて、「容器」のさまざまな用途が、あるいはさまざまなタイプの「容器」が指示されているのであるが、じつは、これらのほとんどは、現実の行政文書には発見できない(Krispijn 1992)。つまり「容器」リストには、現実にも用いられる「容器」と、いわば「仮想」された「容器」とが、混在して書かれているのである。

「都市」リスト(Englund-Nissen 1993: 34; Abb. 16; Englund 1998: 91, Fig. 26)では、最初の4行で、ウル、ニッブル、アダブ(Ararma)ウルクが言及されている。いうまでもなく、これらの都市は実在している。では当時、リスト冒頭のウルがもっとも権威ある都市として認識されていたのだろうか。たしかにウルは、ウバイド時代からつづくセトゥルメントではあるけれども、リスト成立当時は、規模ではウルクにはるかにおよばない。さて、ウルク・エアンナ 層時代、アッカド地方キシユウチかくのジェムデト・ナスル(古代名はおそらくNIRU)から出土した10をこえる粘土板には、上述の4都市をふくむ計17(?)のセトゥルメント名が表象されている印章(「集合都市印章」collective city seal)が押されており、さらに、おそらくテル・ウカイル(古代名ウルム?、ジェムデト・ナスルよりさらに北方に位置)から出土した1テキストにも、同一の印影があらわれる(Englund 1998: 92-93; Steinkeller 2002)。シュタインケラーは、「集合都市印章」は、ウルクのイナンナ神殿の祭儀費用の負担にかかわって用いられたと考えている。「集合都市印章」や「都市リスト」は、ひとつとがすでに南部メソポタミア(のちのシュメール・アッカド地域)を文化的・政治的に同質な世界と認識していたことを示す、きわめて重要な証拠であるが、ウルが当時もっとも権威ある存在とみなされてい

たと、けっして結論できない。なお、「都市」リストが言及している地名が、さらに南部メソポタミアをこえてどの程度の広がりをもっていたかは、まだ、さほどあきらかではない。⁸

「容器」リストに典型的にみられるように、現実を「仮想」したサインがおおく含まれているという事実は、リストはもともと行政組織で働く書記たちを養成・訓練するために成立したという通説の否定材料ではない。「仮想」サインは、文字記録システムが生まれてまもない段階で、さまざまな要請に対応すべく、サインがつぎつぎに増殖されていった過程を示しているのではなからうか。フェルトホイスがいうように(Veldhuis 2006: 189) 当時、書記たちは現実を「完全に」把握したい、すべてのアイテムを文字サインとして掌握しておきたいという欲求のもと、新サインをつぎつぎに作りだしていたのかもしれない。そして現実の行政過程の記録の場では、これらのサインのおおくは、結局は不必要とみなされて、定着しなかったかのもかもしれない。

エングルンドたちによって「貢納」と名づけられたリスト(Englund-Nissen 1993: 26, Abb. 9; Englund 1998: 100-101, Fig. 30 [フェルトホイスは(Sumerian) Word List Cの呼称を採用している⁹])は、奇妙な構造をもっている。かなりの語彙は、通常のリストにみえる「1」サインいがいに、5、10、60を示すサインを伴う。またリスト前半部3行以下が、そのままリスト後半で繰り返かえされている。さらに、いくつかの「人名」もリストに含まれているかもしれない。もともとは、諸数字とさまざまな実体(動物、金属、容器など)が組み合わされていることから「貢納」が想定されたのであるが、このリストには他の解釈がある。現在エングルンドらが提示しているリストは、後代のテキストによって補強・復元されている。とりわけ冒頭2ラインは、後代になって付け加えられたと想定されるが、これらは、「日」ないし「とき」をあらわすUDサインではじまっているのである。だからエングルンドは、このリストは知られうる最初の文学テキストなのかもしれないとさえ考えた(Englund 1998: 99-100)。後代のいくつかの文学テキスト冒頭は、udではじまるからである(「...のときに」)。またウェステンホルツにいたっては、このリストは神によって与えられ、書記が専有した知識 secret loreの集成なのだという(Westenhholz 1998)。

そのように難しく考えることはないであろう。後代にこのテキストがどのように理解されていたかということと、ウルク a、 層時代にこれがどのような目的

で用いられていたかは、別の問題である。これは、フェルトホイスのいうように、行政記録作成のための範例句集と理解するのが正しいのではないか（Veldhuis 2006）。なによりも行政文書には、数字につづいて諸タームをあやまりなく書くことが要請されたはずである。フェルトホイスは、1、10、60という数字ユニットがあげられていることの重要性を正しく指摘している。この3数字ユニットを用いれば、現実の行政過程での数的な把握、表現はほぼ完璧に実現できる（e.g., $60 \times 2 + 10 \times 3 + 1 \times 5$ UDU「155頭の羊」）。文学や「秘知識」が書かれているというのであれば、なぜ神や星などがテキストにけっして表現されないのか。また魚や豚・野猪・鳥をのぞいた野生動物もあらわれないようである。それは「貢納」いがいの「語彙リスト」でもおなじことである。いわば「語彙リスト」は、書記が掌握しなければならぬ行政世界を「できるだけ完全に」描くことを目的としている。

ウルク期最末期に、行政組織の急速な複雑化に対処するために文字記録システムが生まれ、つづくジェムデト・ナスル時代にそれが大発展した。そして文書を作成する書記には、さまざまな教材が必要であったことは当然である。「語彙リスト」は教材であった。

ジェムデト・ナスル期は、文字記録システムが各地に爆発的に広まっていった時期であるようにみえる。「集合都市印章」の存在が示唆するように、また「古拙的な」不動産売買を公的に周知させるための記録がおおくのこっていることから想定されるように、当時、シュメール・アッカド地方のおおくの都市でこのシステムが採用されていたであろう。わたしは、さらに北メソポタミアでも（たとえばナガル[テル・ブラク]）、この時期に<シュメール文字>記録システムが採用されたという証拠が見いだされたとしても、けっしておどろかない。¹⁰

ロゴグラムとしてのシュメール文字が、行政記録システムにいかにかに適合的であったか。少ない文字数のシュメール語彙を、文法要素をほとんど加えることなく粘土板に書きこめばよかったからである。またたとえシュメール語彙が、セム語として発音されたとしても、問題はないではないか。

行政記録システムが採用されたセトゥルメントでは、かならず書記の養成が必要とされる。書記養成のための「語彙リスト」も、かならずウルクから輸入されていたはずである。だから、各地の行政文書にみえる文字サインは、おどろくほどよく似ている。すでにわた

しは、「<シュメール文字>文明の成立と展開」を象徴するのは「語彙リスト」だと述べた。それはこのような意味においてである。

前3千年紀にはいると、リストにみえるおおくの語彙は、書記たちには理解不可能になっていたであろう。にもかかわらず、すくなくともアッカド王朝時代までは、北メソポタミア、イランやシリア南西部にいたるまでの各都市でそれらは書記たちによって、書きつけられた。「職業」リストED Lu Aがいかに広く普及していたかは、すでにふれた。行政文書の作成という点を考えれば、諸リストのなかでLu Aがもっともおおくのこっているのは当然なことであるが、他リストも、やはり各地で書きつけられていた。たとえばエブラでは、前3千年紀のシュメールで存在したほぼすべての「語彙リスト」を発見できる（Michalowski 1987: 170; Englund 1998: 88-89）。そればかりでなく、エブラではED Lu Aにエブラ語ふうの読みを与える努力も行なわれていたし、それとは独立してシュメール語にエブラ語訳を与える長大なテキスト、すなわち、真の意味での「語彙テキスト」lexical textsさえも、南部メソポタミアにさきがけて成立していたのである（Ebla Vocabulary: Pettinato 1982 [MEE 4]）。¹¹

ただ、ウルク期末期やジェムデト・ナスル期に生まれた語彙リストが、500年もの経過をへて、しだいに現実とはそぐわなくなったことは、やはり否めない事実なのであろう。古バビロニア時代のニップルで書記たちが学んださいに依拠したのは、あらたに成立した「職業リスト」(OB Proto-Lu) などであって、ED Lu Aではなかったようである。いっぽうで後者は、まちがいなく、はるか古代の知恵を示すものとして尊重されていた。だからこそ、ED Lu Aは、「貢納」リストとともに6面体プリズムとして保存されていたのである。はじめてリストは、古代の「秘密の知識」secret loreを伝えているとみなされたのである。

古バビロニア時代にさかんに用いられた職業リスト(OB Proto-)Luは、初期王朝期後半にはまだ成立していなかったであろう。かわって、当時、ED Lu B、C、D、E、Xとよばれる職業リストが存在している。これらはED Lu Aとは系統がちがう。これらはいずれも、シュメール地方では中部のファラないしアブ・サラビク文書群のなかに含まれており、それより早期のテキストは、発見されていない。これらのおおくは、1969年にはじめて本格的に論じられたのであるが（MSL 12: 13-21）、ファラ文書は不正確な転写でしか公刊されていな

かったし、またエブラ文書はまだ知られていなかったから、議論は不十分なままにおわっていた。

当初はED Lu B、C、Dはファラ文書にしか含まれていないと考えられていたが、いまでは、すくなくともED Lu Cは、おそらくウル第3王朝時代のニップルでプリズムとして作られていたことがわかっている(Taylor, DCCLT)。この事実、すでにウル第3王朝時代には、ED Lu Cはあまり書記の実訓練には用いられなくなっていたことを示唆しているのかもしれない。なおファラ出土ED Lu Cは、表面部と裏面部が反対に理解されて公開され、結果として行番号もまったくまちがって与えられていたという。ED Lu CにかぎらずED Lu Dも、個別サインの転写はきわめて不正確であったらしい。¹²

それに比べて、ED Lu Eはいまや正確に理解されている。これは全約220行という長大なリストであって、これまでアブ・サラビク(OIP 99 nos. 54-60)、エブラ(MEE 3 nos. 6-11)、ガスル(HSS 10 222)およびキシユ(MAD 5 35)で発見されている。それらは南部メソポタミア編年という初期王朝期 期後半およびアッカド時代に書かれていた。ガスル(のちのヌジ)はキルククちかくのセトゥルメントであるから、このリストは3千年紀の後半になって成立し、主としてシュメール中・北部からアッカド地方、さらにメソポタミア北部やシリア地方でよく用いられたと推測できるであろう。ペティナートはエブラ出土MEE 3 no. 6最初の2コラムの職名を、つぎのように読んでいる。dub-sar (obv. i 1) sanga(i 2) sagi(i 3) šabra(i 4) ensi₂(i 5) nu-banda₃(i 6) šagina(i 7) kuš_x(i 8) gal-sukkal(ii 1) gal-unken(ii 2) eme-bala(ii 3) sa₁₂-du₅(ii 4) muhaldim(ii 5) šandan(ii 6) gal₅-la₂(ii 7) gal-kinda(ii 8) gal-nimgir(ii 9) nagar(ii 10)³ウルクで生まれたED Lu Aにみえる官職のかなりは、いまや語義がわからなくなっている。これにたいして、ED Lu Eの職名は、ほとんどが了解可能である。ED Lu Eは、当時の大公共組織のなかのさまざまな「身分」、「職業」を表現するという、きわめて現実的な目的のもとで、おそらく初期王朝期の後半、あるいは後半ちかくなって、シュメール南部ウルク以外の都市で、たぶんシュメール中・北部ないしはアッカド地方で成立したのであろう。第4行にみえるšabra(PA.AL)は、アッカド時代になるまではシュメール南部(たとえばラガシュ)では用いられることのない職名なのである。そして、最近になって、この職業リストからの抜書きテキストが、アッカド時代、おそらくナラム・シン王時代のウル・ケシュ(遺跡名テル・モザン)から出土した(Buccellati

2003)。ウル・ケシュはメソポタミア北部の大都市ナガル(テル・ブラク)からさらに約60キロも北方に位置し、まちがいにフルリ文化世界に属していた。それでもED Lu Eが学ばれていたのである。

いまやわれわれは、初期王朝期後半までは、ウルク起源の「語彙リスト」がシュメール・アッカド地方だけでなく西アジア各地でさかんに学ばれていたけれども、その頃から別系統の諸「語彙リスト」、すなわち行政組織の実態をより正確に反映した諸リストが各地で利用されはじめたと考えたらよいのであろう。そしてそれらが刺激剤となって、古バビロニア時代の「語彙テキスト」が生まれたと理解すればよいのであろう。

註

¹ エアンナ a、層時代のウルクでは、「神殿」組織を核とする政治組織が成立したのであり、のち「神殿」にかわって、はじめて世俗的な王権があらわれるという解釈がある。これにしたがえば、シュメールの国家形成が完了するのは、前3千年紀にはいつてのちのことになる。わたしは、このような立場を採らない。これについては、前川1995を参照。

² シュマント・ベッセラの「トークン・セオリー」(Schmandt-Besserat 1992)には、この視点が決定的に欠落している。

³ わたしは<権力装置>としての経済の掌握を重視する。それも奢侈品を獲得するための経済活動ではなく、ステイブル生産の側面を重視する。南部メソポタミアの国家形成のモメントとして遠距離交易を重視する考えがある。アルガゼもそのような立場にいるが、彼にあっては、どのような特質をもつウルク「国家」がいつ成立するのが、いつまでも明らかではない。また彼は、かつてのように「ウルク世界システム」の語を用いなくなった現在も、ウルクの対外交易を「帝国主義(的)」とよび(Algaze 2001)、南部メソポタミア地方が都市化にむけて「離陸」するモメントが遠距離交易であったと理解する(Algaze 2007)。またさいきん衛星写真を分析することによって、プルネルは前4千年紀から3千年紀にかけてのメソポタミア南部では沼沢が大変に大きな面積を占めていたことを強調して、南部メソポタミアでは、もともと「都市」は沼沢のなかの「小島」のような存在から発展した結果なのだという(Pournelle 2007)。このような考えに立てば、やはりメソポタミアの国家形成の要因は交易に求められるであろう。

けれども、それは、ウバイド3期にはいつて、なぜ急激に南部メソポタミアの文化要素がメソポタミア全

域・シリアに広がっていくのか、つづいてウルク中期にもなぜ同じような拡大現象が存在するのか、ウルクはなぜ大規模な遠距離交易をはじめることができたのか、なにも説明をしていない。やはりその背景として、独特のタイプの灌漑農業の大発展と大規模な羊毛生産が想定されるべきではないか。沼沢地の魚類は遠距離交易の資本とはならない。[ただし、ウバイド3期以降、灌漑農業と羊毛生産が大発展したというわたしの考えについての考古学的な証明は、まだできていない。]さいきんウィンターは、支配者がイナンナ神と向きあって立つシーンを描いた「ウルクの大杯」では、さらに下段に、灌漑水路、大麦と亜麻(すなわち耕地)、羊、収穫物と酪農製品のイナンナ神殿への貢納、搬入が示されているとして、「ウルクの大杯」は<農業国家>誕生の象徴だと強調した(Winter 2007)。わたしも彼女と同じ立場に立つ。

4 王碑文や宗教、文学テキストよりもはるかに早く、不動産売買の成立を告知するための記録が、すでに3層時代に成立していることにも注意すべきである。しかもこれらは、おそらく、シュメールに北接するアッカド地方でもおおく書かれていた(Gelb-Steinkeller-Whiting 1991: 3f.)

5 Edubba D 13-14: mu didli^[d]inanna-teš2-ta en-na nig2-zigal2 edin-na zag lu2-šū-ka-še3 i3-sar.

6 インターネットで、これらの原粘土板写真と翻字とを参照することができる。MS 2429/1: <http://cdli.ucla.edu/P006042>。これらはウンマないし周辺遺跡で盗掘されたとの未確認情報がある。

7 Canonical lu2 = ša (MSL 12: 93-94) では、šī-ta ŠITA (25) eš-da ŠITA.GIŠ.KU(26)につづいて、以下の語に「王」šarruというアッカド語訳が与えられている。me-enGA2 x ME.EN(27) ul^u-MINmen(28) pa-ra-agBARA2(29) kur^{ku}-ra+giigi(30) ka2-kalam(31) pirig-galam(32) giš ti-iš-ka-ri-niKU(33) giš-gišnimmar(34) SAG^{ti}-ri-giAN(35) nun-pi-ri-ki-pirig(36) MIN^{pi}pirig(37) gu2-e-ri-šiSAL + KU(38) gu2-za-la-qaUD(39) gu2-gal(40) luga(41) [ur-me: šar-ri(41a) ur-me-me: šar šar-ri]。

8 「都市」リストには西方セム遊牧民の地域や東方ササが言及されていると解釈されることがある。Englund-Nissen 1993: 147: Cities 30 (Susa) Cities 35 (Tidnim)。

9 Sumerian Word List Cとは、エブラ出土の「貢納」リストにたいしてペティナートが与えた呼称である(Liste di parole sumeriche A, B, C, D, E [Pettinato 1981: 135ff.])。Word List Dは、エングルンドらのいう「穀物」リストのことである。

10 テル・ブラク(ナガル)で出土した2「絵文字」記

録が、文字化を目ざす地方的なところみの証拠と解釈されたことがある(Finkel 1987)。年代が確定できないことから、エングルンドはこれには批判的である(Englund 1998: 42⁸⁴)。たとえナガルにおいて文字記録が進みはじめていたとしても、<シュメール>文字記録システムが到達すれば、それはたちまち瓦解したのではなからうか。さいきんナガルではおそらく前3千年紀中葉をわずかに過ぎた時期のED Lu Aが出土したが(Michalowski 2003)より早期、もっともはやくてジェムデト・ナスル期のED Lu Aが出現してもよいとおもう。

11 「エブラ語彙集」のなかのシュメール語のみを集成したリスト群もエブラで発見されている(Picchioni 1997)。

12 わたしは前3千年紀のメソポタミア、シリアにおけるウマ科動物の呼称を論じたさいに、ED Lu Cリスト「43行」にみえるSIG(= IGI-gunû)UŠをsig7-us2と読んで、「イエロバ追い」と解釈した(前川2006: 5)。大変にうかつなことに、わたしはすでに当時、テイラーによる原テキストのチェック結果がインターネットで公表されていたこと(Taylor 2003)を知らなかった。わたしはMSL 12 14による翻字のうち「34~47行」を引用していた。その箇所は、テイラーによって以下のように翻字されている。括弧内がテキスト公刊者およびMSLの、もともとの行番号である。28) lu2-kuš^uusan3-du3 (41) 29) gu-la2 (42) 30) DU6[?]:NITA(+KUR[?]) (43) 31) lu2-EN-il2 (44) 32) lu2-gu4:DI:lah4 (45) 33) lu2-anše (LAK 239) DI:lah4 (46) 34) lu2-mas2-nita2-HI (47) 35) DU:DI(34) 36) gab2-ra2 (35) 37) sipa-anše (LAK 239) (36) 38) lu2-anše-HAR(37) 39) in-TAR(38) 40) lu2-e2-gigir2 (39) 41) kuš7 (40) わたしにとって不幸なことに、問題の30行(ふるくは「43行」とされていた)だけ、テイラーのチェック結果は、原刊行者の翻字とかなり異なっている。

13 かつてエブラ文書が知られていなかったときには、第1行は[ens]i2と復原され、これは都市支配者を示すと了解されていたのである(MSL 12 17)。じつはensⁱ2は5行目にあらわれる。2行目はsangaでなくumbisagと理解されるべきである。

文献

Algaze, G.

2001 "The prehistory of imperialism: The case of Uruk Period Mesopotamia," in: Rothman, Mitchell S.(ed.), *Uruk Mesopotamia & Its Neighbors: Cross-Cultural Interaction in the Era of State Formation*, Santa Fe, 27-83.

2007 "The Sumerian takeoff," in: Stone, Elizabeth C.

- (ed.), *Settlement and Society: Essays Dedicated to Robert McCormick Adams*, Los Angeles, 343-368.
- Archi, Alfonso
1987 "The "sign-list" from Ebla," *Eblaitica* 1, 91-113.
- Buccellati, G.
2003 "A Lu E school tablet from the service quarter of the royal palace AP at Urkesh," *Journal of Cuneiform Studies* 55, 45-48.
- Civil, M.
1982 "Studies on Early Dynastic lexicography, 1," *Oriens Antiquus* 21, 1-16.
1985 "Sur les 'livres d'écolier' à l'époque paléo-babylonienne," in Durand, J.-M. et J.-R. Kupper (éd.), *Miscellanea Babylonica: Mélanges offerts à Maurice Birot*, Paris, 67-78.
- Civil, M. and G. Rubio
1999 "An Ebla incantation against insomnia and the Semitization of Sumerian: Notes on *ARET* 5 8b and 9," *Orientalia* NS 68, 254-266.
- Gelb, I.J., P. Steinkeller and R.M. Whiting
1989, 1991 *Earliest Land Tenure Systems in the Near East: Ancient Kudurrus* (OIP 104), Chicago.
- Falkenstein, A.
1936 *Archaische Texte aus Uruk*, Berlin.
- Finkel, I.L.
1984 "Inscriptions from Tell Brak, 1984" *Iraq* 47, 187-201, pls. 32-36.
- Englund, Robert K.
1998 "Texts from the Late Uruk Period," in: Bauer, J., Robert K. Englund, and M. Krebernik, *Mesopotamien: Späturuk-Zeit und Frühdynastische Zeit*, Fribourg, Schweiz, 15-233.
- Englund, Robert K. and Hans J. Nissen
1993 *Die lexikalischen Listen der archaischen Texte aus Uruk* (Archaische Texte aus Uruk 3), Berlin.
- Krispijn, Theo, J.H.
1992 "The early Mesopotamian lexical lists and the dawn of linguistics," *Jaarbericht van het Vooraziatisch-Egyptisch Gezelschap (Ex Oriente Lux)* 32, 12-22.
- Langdon, S.
1928 *The Herbert Weld Collection in the Ashmolean Museum: Pictographic Inscriptions from Jemdet Nasr* (OECT 7), Oxford.
- Michalowski, P.
1987 "Language, literature and writing at Ebla," in Cagni, Luigi (ed.), *Ebla 1975-1985*, Naples, 165-175.
- 2003 "An Early Dynastic tablet of ED Lu A from Tell Brak (Nagar)," *Cuneiform Digital Library Journal* 2003.3 (<http://cdli.ucla.edu/pubs/cdlj/2003/cdlj2003-003.html>), 1-8.
- Nissen, Hans J.
1969: "Preliminary remarks (on the Uruk IVa and III Forerunners)," in Civil, M. (ed.), *The Series lú = ša and Related Texts* (MSL 12), Rome, 4-8.
1981: "Bemerkungen zur Listenliteratur Vorderasiens im 3. Jahrtausend (gesehen von den archaischen Texten von Uruk)," in: Cagni L. (ed.), *La Lingua di Ebla*, Naples, 99-108.
1986: "The development of writing and of glyptic art," in: Finkbeiner, U. and W. Röllig (eds.), *Ĝamdat Nas :period or Regional style?* Wiebaden, 316-331.
1988: *The Early History of the Ancient Near East: 9000-2000 B.C.*, Chicago (English transl. of *Grundzüge einer Geschichte der Frühzeit des Vorderen Orients*, 1983).
2002: Uruk: Key site of the period and key site of the problem, in: Postgate, J.N. (ed.), *Artefacts of Complexity: Tracking the Uruk in the Near East* (Iraq Archaeological Reports 5), Warminster, 1-16.
- Nissen, Hans J., Damerow, Peter and Robert R. Englund
1993 *Archaic Bookkeeping: Writing and Techniques of Economic Administration in the Ancient Near East*, Chicago (Engl. transl. of *Frühe Schrift und Techniken der Wirtschaftsverwaltung im alten vorderen Orient: Informationsspeicherung und -verarbeitung vor 5000 Jahren*, 1990).
- Pettinato, Giovanni
1981 *Testi lessicali monolingui della Biblioteca L. 2769* (MEE 3), Naples.
1982 *Testi lessicali bilingui della Biblioteca L. 2769* (MEE 4), Naples.
- Picchioni, Sergio Angelo
Testi lessicali monolingui "éš-bar-kinx" (MEE 15), Rome.
- Pournelle, Jennifer R.
2007 "KLM to CORONA: A bird's-eye view of cultural ecology and early Mesopotamian urbanization," in: Stone, Elizabeth (ed.), *Settlement and Society: Essays Dedicated to Robert McCormick Adams*, 29-62.
- Schmandt-Besserat, Denise
1992 *Before Writing*, 2 vols., Austin.
- Steinkeller, P.
2002 "Archaic city seals and the question of early Babylonian unity," in: Abusch, T. (ed.), *Riches Hidden in*

Secret Places: Ancient Near Eastern Studies in Memory of Thorkild Jacobsen, Winona Lake, 249-257.

Taylor, Jon

2003 Collations to ED Lu C and D, *Cuneiform Digital Library Bulletin* 2003:3 (http://cdli.ucla.edu/pubs/cdlb/2003/cdlb2003_003.html)

Veldhuis, Niek

2004 *Religion, Literature, and Scholarship: The Sumerian composition «Nanše and the Birds»* (Cuneiform Monographs 22), Leiden.

2006 “How did they learn cuneiform?: Tribute/Word List C as an elementary exercise,” in: Michalowski, P. and N. Veldhuis (eds.), *Approaches to Sumerian Literature. Studies in Honour of Stip (H.L.J. Vanstiphout)*, Leiden, 181-200.

DCCLT “The archaic lexical corpus,” *Digital Corpus of Cuneiform Lexical Texts* (http://cdli.ucla.edu/dcclt/intro/arch_intro.html), 1-12.

Veldhuis, Niek C. and H.V. Hilprecht

2003-2004 “Model texts and exercises from the temple school of Nippur: BE 19,” *Archiv für Orientforschung* 50, 28-49.

Westenholz, Joan

1998 “Thoughts on esoteric knowledge and secret lore,” in: Prosecký, J. (ed.), *Intellectual Life of the Ancient Near East* (Papers Presented at the 43^e RAI, Prague, July 1-5, 1996), Prague, 451-462.

Winter, Irene J.

2007 “Representing abundance: A visual dimension of the agrarian state,” in: Stone, Elizabeth (ed.), *Settlement and Society: Essays Dedicated to Robert McCormick Adams*, 117-138.

関 雄二

2006 『古代アンデス：権力の考古学』（京都大学学術出版会）

前川和也 1995

1995 「＜都市革命＞あるいは都市社会の成立：古代メソポタミアにおける」山田慶兒・阪上孝編『人文学のアナトミー：現代日本における学問の可能性』（岩波書店）199-216。

2006 「前3千年紀メソポタミア、シリアのイエロバとノロバ：再考」『西アジア考古学』7号、1-19。

事務局だより

この8月の第3次現地調査では、ガーネムアリ遺跡の2つのトレンチで発掘調査を開始しました。短期間の発掘であったにもかかわらず、前期青銅器時代の遺構が出土しました。重要な遺物の出土も少なくなく、ガーネムアリ遺跡が調査地域における重要な拠点遺跡であったことを示唆しているようです。

今回の現地調査には、総括班と計画・公募研究班の都合10班が参加しました。現地調査における研究班相互の連携が続くことを確信しています。

今回のニューズレターには、「2007年度ビシュリ山系北麓ケルン墓サーベイ」、「比較言語学から見たセム語の起源 (Urheimat)」、「「<シュメール文字>文明」のなかの「語彙リスト」という、本領域研究の今後の展開にとって示唆に富む論考3編が掲載されています。現地調査が急速に進展したいま、時宜を得た構成になったと思います。

今後も、執筆担当班、原稿の締切期限につき周知徹底をお願いします。また、研究代表者が執筆されない場合は研究分担者、あるいは研究協力者の執筆ということをお願いします。なお、研究分担者、研究協力者のうち、早急に執筆を希望される方がいましたら、執筆担当の順番にこだわらず掲載しますので、ご連絡ください。

(大沼克彦)

Newsletter 「セム系部族社会の形成」 No.7 2009年9月10日発行

発行： 文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」
「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」
代表 大沼克彦

編集：総括班（大沼克彦・藤井純夫・西秋良宏・常木 晃・宮下佐江子・佐藤宏之）
事務局：〒195-8550 東京都町田市広袴1-1-1 国士館大学イラク古代文化研究所内 大沼研究室
Tel：042-736-5489 Fax：042-736-5482 E-mail：kaonuma@kokushikan.ac.jp
ホームページ：http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryouiki/index.html

